

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 145号

平成26年5月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (7)

(「石館守三先生金曜会語録」より (3))

阪井先生から学んだこと

私は阪井〔徳太郎〕先生から二つのことを学んだ。

1 先生が 27, 8 歳の頃、明治の未だ文化の低い頃、キリスト教が未だ日本に根をおろしたと言えないころに Christian dormitory [キリスト教の寮] の基礎を置いたということはまことに先生が非凡なお人であったことを思います。苦学の人であったあつたが、外交官、実業家として恵まれた当時にあつて同志会を非常に愛したということとは非常に大きなしかも隠れた仕事であった。

2 晩年高血圧の床に臥されて後絶えず同志会を思いよく来られた。また先生の愛された米国にみじめな敗戦の憂目にあい、神の試練にも匹敵する試練をお受けになったにもかかわらずますます深い信仰

心をいだかれた。このことに感謝する。

この二つのことから学ぶものは何か。great work〔偉大な仕事〕の内容は何か。この世における大部分の仕事はいつかは消える。great work は時間とともにますます大きくなる。時代を超越する。コリント前書 15 章にあるように主にあって苦勞することは決して無駄にはならぬ。主にある苦勞のむくいとしてその名が天に記される、そして時代と共に輝く。真理は消えることがない。

(昭和 36 年 6 月 16 日 阪井先生追悼記念会)

Freedom は Democracy 社会の唯一の原理か

Freedom〔自由〕が Democracy〔民主主義〕社会の唯一の原理のように思われているが単なる Freedom が人間の幸福を生むか疑問に思う。例えばアメリカという国は Puritan〔清教徒〕がイギリスの伝統的な社会から作ったもので、初期の Puritan の精神は今も残っている。しかしアメリカを富ますためには力を持つためには科学の進歩, business, industry〔仕事、産業〕の発展が必要であるとして、手段としての科学 business を進歩させたが、現実の姿はユートピアからかけ離れたものになっている。中流社会の堅実さは模範とするにたるが一般に物質に自由を奪われている。…

日本では戦後国家主義を放棄し新しい Democracy—自由をもって出発しようとしたが、責任のない自由が果してこの社会を健全にする真の土台をなしうるか疑問である。社会文化は進歩したが自由過剰が腐敗の原因となっているのではないか。ヨーロッパ、アメリカにくっついていく日本を見ると日本は古いヨーロッパの真似をすべきか、新しいアメリカを模範とすべきかと考える。Discussion〔議論〕してほしい。

どの道が最善だろうか。聖書から学ぶように、人におのこのの使

命がるように国にもおのおのの使命がある。ドイツにはルターを生んだ精神、イギリスには開拓精神、アメリカにはピューリタン精神がある。日本には仏教、儒教に訓練された風土で果たす使命がある。キリスト教はそれに生命を与えた。生命は新しいものを作る。

結論として、諸国の有様を見て感ずることは、人間は自ら努力しているが歴史の試練を受けてその失敗を悟るまで神は待つであろうということである。生まれながらの罪を改善しなければならない。罪があれば理性があってもユートピアにはこない。聖書から学んだこのことは外国をまわって疑いをもたなかった。自分を低くして悔い改めなければ滅び以外はない。

それでは神を信ずる教会は社会を救う力があるか。…我々の心の中にある罪が問題である。これを改善せずして社会をよくすることはできない。自由も役に立たない。神の恩恵により罪を克服できるように、又生まれ変わることが出来るように、そうでなければ本当の幸福はない。自由とか Dmocracy とかが社会の唯一のもののごとく信奉しているが、歴史と社会の現象とを改造する原理はキリストの生涯である。迷いのある時キリストは如何にそれに対処したか反省する必要がある。

(昭和 36 年 12 月 1 日 金曜日)

関東大震災の体験

若いころの体験から。関東大震災、私は8月31日の夜行で青森に帰った。着いて茶の間でくつろいでいる時地震があつて、しばらくして東京の地震を知った。すぐ東京へ引き返した。川口まで汽車で来て後は歩いた。悲惨な光景を見た。死体累々、この時私の信仰はぐらついた。何でこんなに多くの人々が死なねばならないのかと思つた。…

諸君は聖書を学ぶ機会を与えられた。大いなる恵み、これでクリスチャンのみが神のうちにあると考えるのは危険だ。以外の人々も神のうちにあるのだ。悪人も同様しばし神に許して存在させられたのだ。そして彼らのために尽くすべきだ。我々が神から委託されたものは神を知らぬものへも愛を行なうことだ。これがキリストの証だ。我々レーマン〔平信徒〕のなすことは神にさからうものの中へも入ることだ。我等が信仰を捨てれば彼らの勝ちだ。我等は主の僕たるの自覚をもって御心をこの世に実行をもって示すべきだ。どんな所でもキリストに一生を捧げるとの気持ちで送れば感謝だ。どんなことにも最後は神が始末して下さることを信じて進むべきだ。

(昭和 37 年 1 月 26 日 金曜日)

人づくりとは何か

人づくりとは何か。化学、政治、経済で人間性が優先する。それが強調されねばならぬ。人間性、その最も高貴なるものとは理性的、gentle [寛大な]、良識ということだけでなく、本当の人間らしい人間とはイエスの指した、人の上に立つのではなく、イエス御自身がそうであったような、人の足を洗ってあげる人間である。人生を愉快に平和にということに留まるのではなく人生における十字架の意義を知らずして本当の平和はない。人生は gentle とか良識ぐらいでは解決しません。人の為に我を捨てるキリストの愛までこななければ解決はない。…

もう一つ、神はこの世を大きな摂理の中に守っているということ。科学が進歩して人類が文化が進歩したと思ってもそれが戦争を不可避にしている。この摂理、これは摂理だと思うのだが——神は科学の進歩を通して摂理を示し給うたと思うのだが、人間性を無視しては駄目だということである。環境、物のみというナンセンスは神これを否定し、それを人間に示されたのである。ソ連もそれに気付くでしょう。人間性を無視してはいけないと思います。

(昭和 37 年 9 月 14 日 金曜日)

人生の荒波を理性で早く解決して了わないように

私は何の為に勉強し、又大学に入るのかという疑問が起こり、未だ祈る対象を知らない自分だったが、はからずも同志会に入って人生の目的について考える機会を与えられたことは感謝であった。本当に求むれば真実が与えられるという信念がある。信仰を与えられたことは感謝であった。本当に求むれば真実が与えられるという信念がある。信仰を与えられたことは感謝であり、人間の自然性が神と反するものでキリストの福音は受け入れられないのだから尚更である。

卒業生に言いたい。社会に出るがまだ人生の経験が少なく荒波に会うと信仰のくもることがある。悪人がのさばり正しい人はみじめな正義のない世間がある。Bible〔聖書〕から学んだ信仰がふらふらすることが何回もあるだろうし、かかる不正義を神がすべ給うこの世界にあるかという疑問も起る。どうかそういう時金曜会を思い出してほしい。ガリラヤの湖畔でキリストが話したごとく、理性でそう早く解決して了わないように。そして疑いの嵐を切り抜けて貰いたい。キリストを見上げて正しく歩んでほしい。

(昭和 38 年 1 月 25 日 金曜日)

カイザルのものはカイザルに返せ

さてもう言うべきこともないほど皆がよく話してくれたが一つ。人生の試練に出会ったとき「ふるさと」を思い出してほしい。もう一つ。この世の矛盾にぶつかった時不満が出るがしかしその不満をそのままぶっつけて出すのはクリスチャンの道ではないと思う。パウロの言うごとく、被造物は皆苦しんでいる。その中に我々もいて逃れようがない。キリストは何というであろうか。「カイザルのものはカイザルに返せ」そして自分に与えられたことに最善を尽くしてやること、それが本当のキリストの道であり、又社会の改革となる。この矛盾の中にあってこそ、我々の存在の積極性がある。そうすれば今日司会者の読んだヨハネ伝 16 章の如くなる。「求められるものはすべて与えられる」ようになる。私共がどうすればよいかという時は、キリストがどうするかということを考えて、この世の矛盾の中で矛盾と共に担って進んで行ってほしい。

(昭和 38 年 2 月 1 日 金曜会)

如何に人生の「出会い」を感得するか

始めにご自分が同志会に入られた時の「迷い子」たることを話された。

人生に疑問を感じ自分の進むべき道を示してほしいと願い祈った。その頃はからずも友人に奨められて入会した。大学とは案外つまらないところだという感じだったが、3年生の頃初めて学問することの喜びを知った。もし下宿していたら現在の自分はないと思う。同志会において各人各様の態度に接し、人間的な視野が広がった。

更に阪井会長、高瀬先生に接して高校時代から自分の求めていたものはこれだと悟った。安心感を得た。如何に人生の「出会い」を感得するか、これが問題である。刻々あらわれる出会いに如何に対処していくか、如何に選択するか、それが人生である。

ルーテルの問答について：Beruf〔職業、天職〕という言葉に真の意味を与えたのはルーテルである。与えられた仕事、環境をどう受け止めるか。Beruf と思って受け止めるか否か。当然に「与えられた」という信仰に基づく人の勝利である。どう受け止めるか。信仰に裏付けられた価値選択が確信となるだろう。同志会生活も一つの Beruf として受け止め利用してほしい。（昭和 38 年 5 月 10 日 金曜会）

ライ研究のこと

大学へ入りライ病院へ行った。依然としてもとのままであった。数千年前の治療法が用いられ、現代の科学から見放されていた。油をぬるか注射するかの違いである。一生かけてライのことをやろうと思った。先生からもっと他のことを勉強しろと言われ一時感傷的になっていた。偶然戦時研究で結核を取り扱った。スルホンという薬は結核には実用化されにくいですがライにはどうかと思った。中立系の雑誌からスルホン剤がライに効くというヒントを得た。終戦前後である。プロミンという名前のものである。

試験の希望者を募ったが一人もいない。もう薬を信用しないのである。戦地から帰って来た青年が申し出た。2ヶ月たったら非常にいい結果が出た。他の患者が承知しない。血書まで持ってくる。勿論全部治るわけではない。初期のものは治る。これは私の手柄ではない。アメリカで発表したものからヒントを得たものである。ただ子供の時から関心は持っていた。若い時の願いが真実であれば必ず実るものである。このことを教えている。

(昭和 38 年 6 月 28 日 金曜日)